

だまだ低い。

労働力を多く必要とする作物の減少、収益性の高い作物の増加、そして粗放栽培可能な作物が横ばい状態にあることは、1960年以降の工業団地出現・人口増加に見られる都市化の影響による経営耕地の減少・農業就業者人口の他産業への流出に起因する。

都市化の進展に伴う農地転用状況での、かつての工場用地主導型から宅地主導型へ変容している傾向は、神奈川県内における動向と類似しているが、転用されずに残った経営耕地の利用形態及びその変化を見ると、秦野盆地における都市化は、神奈川県に比べてやや緩慢であると言える。農業においては畑作を基盤とし、都市化の影響も受けてはいるが、近郊農業に徹しきれず、農業外への人口流出の著しい地域に見られる土地利用及びその変化の状況を示しており、これが、秦野盆地における土地利用の形態である。

以上の状況は、当地域内で均一に見られるのではなく、旧町村別では、盆地出口に当たる本町地区より西に向かう程、都市化の伸展は遅く、たばこ・陸稻の栽培放棄が遅れる等の現象が見られ、これには、各地区における地形等の自然条件に加えて、交通機関等の人文条件や、隣接地域からの影響がとり上げられる。

愛知県渥美郡赤羽根町の農業の

発展と地域の変貌

桑 原 理 子

赤羽根町については、これまでの研究で以下の点が明らかにされていた。①地域の発展が工業化によってではなく、商業的農業の発展によって行われてきた地域である。②その農業は広範な洪積台地上に展開される畑作農業である。③近年、施設園芸を中心とするきわめて集約的な農業が営まれており、その結果、農業は高位生産性を示し「近代的」な形態を示している。

しかしこれまでの研究では、以下の点が見落とされがちであった。①農業の発展を必然化してきた諸要因の分析。②農業の発展にともなう農業・農民問題の解明。③農業の発展がもたらした地域の変貌の把握。本論文ではこの3点に重点を置いて考察を進めた。

実際の調査・研究にあたっては、できるだけ農家の現実に即した状況が把握できるよう、アンケ

ート調査、農民との対話、農村青年との討論会などを行ない、積極的にこれを取り入れた。

本論文で明らかにした点は以下のとおりである。①広範な洪積台地、多発する早害、台風の打撃などの地域的特性により、赤羽根ではより商業・流通資本がとらえやすい商業的農業畑作部門においてのみ、農業の発展が可能であった。②したがって赤羽根農業の発展は、商業的農業のより高度な展開によるものであり、その最も高度な発展段階が現在施設園芸を主体とするきわめて集約的な農業としてあらわれている。③農業における商業化の進行は、農業がより広範に、深く資本主義経済の中へ、すなわちその再生産構造の中へ取り込まれていく過程にほかならない。そこでは農業の地位は常に従属的・受身的である。このことが赤羽根の農民層分解を促進し、地域の発展を方向づけてきた。④日本資本主義の地域への諸要請と地域自らの要求が対立するなかで農民層分解として現象しないうちでも、地域（赤羽根）には多くの農業・農民問題が内包されてきた。今日、表面的には「豊かな農村」と言われていようとも、その背後には、たとえば過重労働（特に婦人の）や資金難をはじめとして多くの深刻な農業・農民問題が存在する。⑤現代の日本資本主義は、地域に対して集約的で大規模な専門的経営を要求する一方、「東三河臨海工業地域」建設による急速な「都市化」工業化への傾斜という矛盾を押しつけた。そのなかで今後の地域の発展は、大規模な農民層分解という方向で行なわれざるを得ない様相を強めている。

大宮台地東南部の農業地理的考察

— 植木栽培を中心として —

齊 上 和 佳 子

〔論文構成〕	第1章	地理的位置
	第2章	自然環境
	第3章	人文環境
	第4章	農 業
	第5章	植木栽培
	第6章	まとめ